Rikkyo Clinical Psychology Research
2018, Vol. 12, 1-10

原　著

親の養育態度に対する認知が子どもの学習意欲に及ぼす影響[1 2]

立教大学大学院現代心理学研究科　辻　美咲[3]

Recognition of Parental Attitudes and the Motivation to Learn

Misaki Tsuji (Graduate school of Contemporary Psychology, Rikkyo University)

This study examined the degree to which children's recognition of their parents' attitudes influences their motivation to learn. A total of 189 high school students (68 male and 121 female) completed a questionnaire that measured the recognition of parents' attitudes in four categories (Emotional Support, Identification, Control, and Autonomy) vis-à-vis their motivation to learn. Findings revealed that a high recognition of "Control" or "Autonomy," and a low recognition of "Emotional support" tended to suppress the respondents' motivation to learn. In contrast, a higher recognition of "Emotional support" from parents resulted in greater levels of motivation to learn. This study suggests that it is important for parents to reduce their disciplinary habits and attributes related to "Control," as well as to allow their children less freedom in their decisions and actions. The present findings also suggest that empathy from parents positively influences the promotion of children's voluntary learning to a significant degree.

Key words : parental attitudes, motivation to learn, children, parents

序　論

はじめに

現代では，子どもの進学率が上昇傾向にある。文部科学省(2016)の学校基本調査によれば，平成28年度における過年度卒を含む高等学校卒業者の大学・短期大学進学率は56.8%で，過去最高であった。また，ベネッセ教育総合研究所(2015)による進路・進学意識に関する調査において，「四年制大学まで」と「大学院まで」の進学を希望する比率が小学生では34.1%，中学生では42.1%，普通科の高校生では83.3%となっており，いずれの比率も2006年の調査より増加していた。進学への意識は数年前と比較して高まっており，小さいときから子どもを学習塾に通わせる等，より学力の高い学校に通うために成績を上げて入試に臨み合格を目指している。

ところが近年，日本における児童や生徒，学生の学力低下が問題視されるようになってきた。国立教育政策研究所(2013)によると，OECDの学習到達度調査(PISA)の2000年と2012年の結果では，2012年において数学的リテラシー・科学的リテラシーの領域で日本の成績が低下傾向にあることが示されている。国際的に見ると日本は上位にいるが，以前と比較して成績が低下していることは目を向けなければならない問題であろう。日本では度々学校での学習指導要領の改訂が行われている。いわゆる「ゆとり教育」も廃止され，学習量は以前よりも増えている。先ほど述べたとおり，受験競争に勝ち残るために小さなときから学習塾に通う子どもも多くいる。その一方で角谷(2008)によると，子どものあいだでは「勉強してもしょうがない」という冷笑主義・虚無主義が広がりつつあり，その結果子どもの学習意欲は低下を続けているという。子どもの中には，勉強は自発的に行うものではなく「させられているもの」という認識になっている者もいるのだろう。このような状態にある子どもたちにとっては，たとえ学習時

間を増やしたり効果的な教材を用いたりしても学習の効果は表れにくいだろう。この学習意欲の低下が，学習量が増えても成績が伸び悩む要因の一つとして挙げられる。では，なぜ学習意欲の低下がみられるのだろうか。今回の研究では，学習意欲に影響を与える要因の中でも「親からの養育態度の認知」という点に着目し，研究を行っていく。

学習意欲に関する研究

まず初めに，子どもの学習意欲に関わる先行研究を取り上げていく。

子どもの学習意欲に関する研究には様々なものがある。柴山・小嶋(2006)は，小学生を対象に，学習意欲と自己効力感(self-efficacy)との関連について研究を行った。効力感とは，自らの意図する結果を生じさせるために必要な行動をうまくできるかどうかという自信のことである(桜井・桜井，1991)。その結果，学習意欲には自己効力感の認知が強く関わっていることが明らかになり，自己効力感が学習意欲の一要素として位置づけられる可能性も示唆された。つまり，自分への自信が周囲への探究心を呼び起こし，学習へとつながっていくのではないかと考えられる。しばしば子どもから「授業が分かると勉強が楽しい」という言葉を耳にするが，それもこの自己効力感が関係しているのであろう。「自分はやればできる」と感じることが，新たな学習へとつながり，またその自分自身への自信が，自発的な学習へとつながっていくのではないだろうか。

また，清水・橘川(2009)も，小学生を対象に学習意欲に影響を及ぼす要因についての研究を行っている。その結果，心理的要因としての「自尊感情」，「将来への展望」が，学習意欲に影響を及ぼしていることが明らかになった。自尊感情とは対象に対するポジティブあるいはネガティブな態度を決定づけるものであり，自尊感情が高いということは，自分自身に対する敬意をもち，自分自身を価値のある人物だと考えているということである(Rosenberg，1979)。つまり，自分に価値があると感じる度合いが強いほど，学習意欲は高まると言える。柴山・小嶋(2006)の研究結果と同様に，この清水・橘川(2009)の研究結果からも，自分自身へのプラスな評価が学習意欲の向上につながっていると推測される。さらに，自尊感情に関する研究として，山下・石・桂田(2010)は，大学生を対象に親の養育態度との関連について研究を行った。その結果，子どもの頃の親の養育態度は自尊感情に影響を与え，高い自尊感情を育てるためには，愛情や共感だけではなく過保護にならずに自律を促進する養育態度が大切であるということが明らかになった。先ほどの清水・橘川(2009)の研究結果にあったとおり，自尊感情の高まりは学習意欲に影響を及ぼす。したがって，過保護ではなく自律を促す親の養育態度は学習意欲の向上につながっていくのではないかと考えられる。

清水・橘川(2009)の研究では，自尊感情の他に，対人関係要因としての「友人関係」，「親子関係」も学習意欲に影響を与えているということが明らかになっている。このことも，子どもの学習意欲に親の養育態度が影響していることを裏付けている。子ども個人の心理的な要素だけではなく，周囲との関係性について知ることも学習意欲について考えるうえで重要なことであろう。特に両親は，子どもが生きていくうえで最も関わりの深い相手である。子どもが生まれて初めて所属する集団は家族である。生まれたときから身近にいる存在として，子どもに多大な影響を与えていることは想像に難くない。まして，子どもを育てるのは親である。その親の養育態度が子どもに与えている影響は大きいのではないだろうか。

嶋野・菅原・嶋野(2008)の研究では，親との愛着関係の良好な児童は，信頼できる人物が常に存在するという内的ワーキングモデルを形成していると考えられるため，教師との関係を親和的であるととらえる傾向が高く，指導態度に対しても受容的になり，教師が指示する学習活動や学習方略及び要求に対して肯定的に行動し，しだいに学習意欲が高まっていくということを示唆している。つまり，親に対して愛着を持ち良好な関係を築けている子どもは，学習意欲が高まるということで

ある。このことは，家庭環境，特に親との関係性が学習意欲に大きく影響することを表していると言えよう。

さらに学習意欲に関する研究として，上田(1974)はMaslowの欲求階層説をもとに学習意欲との関連について論じており，学習意欲が真・善・美などの存在価値を求める高次の自己実現の欲求と同義として考えられると述べている。高次の欲求は低次の欲求が満たされて初めて出現するものである。したがって，学習意欲が高次な欲求に属するということは，より低次の基本的な生理的欲求・社会的欲求を満たすことが学習意欲を高める要因になり得るということである。すなわち，人間は基本的欲求が満たされている場合に学習意欲が高まるといえる。

生理的欲求は食欲の満足・食生活の確保を中心とする欲求であり，社会的欲求には安全・安定・愛情・所属・承認・尊重等への欲求が含まれる(上田，1974)。現代の日本においては，食への欲求はおおむね満たされていると言えるであろう。では，社会的欲求についてはどうだろうか。一般的に，子どもというのは大人によって守られている存在である。内閣府(2012)による子ども・子育て支援法には「一人一人の子どもが健やかに成長することができる社会の実現に寄与すること」と目的が述べられており，第2条には「子ども・子育て支援は，父母その他の保護者が子育てについての第一義的責任を有するという基本的認識の下に，家庭，学校，地域，職域その他の社会のあらゆる分野における全ての構成員が，各々の役割を果たすとともに，相互に協力して行われなければならない。」と定められている。そのため，子どもの生命の安全が日常的に脅かされることはほとんどないと考えられる。しかし一方で，愛情欲求や承認欲求が満たされているかどうかは，一概に断定することはできないだろう。例えば日常的に周囲から高い評価を受ける人もいれば，ほめられることが少ない人もいることが考えられる。子どもたちは，このように低次にある愛情欲求や承認欲求が十分に満たされていないことで高次な自己実現の欲求が満たされず，学習意欲の低下につながっているのではないだろうか。

親の養育態度に関する研究

次に，親の養育態度が子どもに与える影響についての先行研究を取り上げていく。

近年は「モンスターペアレント」と呼ばれる対応困難な保護者が増加し，教育現場が混乱し，教員にとってストレスとなっている(宮田，2013)。理不尽な要求を突き付け，傍若無人な振る舞いをするモンスターペアレントであるが，このような親は一方で子供を大切にしたいという思いが強すぎるが故に過保護な一面もあると考えられる。毛利他(2001)の青年を対象とした研究では，ストレス反応が高くなるほど幼児期における親の統制が高く，一貫性のないしつけがされていたということが示唆されている。この研究からは，親の教育熱心の度合いが強いと感じるほど子どもはストレスを感じるということが推測される。モンスターペアレントから養育を受けた子どもは特に親の圧力を強く受けており，ストレスを感じているだろう。また，モンスターペアレントではなくても，教育熱心であったり干渉・統制を強く受けたりして養育がなされると，同様に子どもは強いストレスを感じていると考えられる。このように，家族，特に親の養育態度は子どもに愛情ではなくストレスを与える可能性がある。

このように，親の養育態度は子どもに何らかの影響を与えると考えられるが，養育態度と子どもへの影響に関する研究にも様々なものがある。肥後橋(2005)は小学生を対象にして，母親の養育態度が子どもの社会的スキルに及ぼす影響について研究を行った。その結果，母親の養育態度には「情緒的支持」,「同一化」,「自律性」,「統制」という4つの側面があり，「思いやりのスキル」に対して親からの「情緒的支持」が影響していることが明らかになった。現在の日本において，育児の主体は母親であることが多い。子どもは成長の過程で母親と関わることが必然的に多くなり，母親の養育態度の影響を強く受けるのだろう。母親

が子どもの悩みに寄り添ったり子どものことを心配したりすることによって，子どもは自分への愛情を感じ，同じ経験を他者にも与えようとするのではないだろうか。

また，酒井他(2003)は，一卵性双生児のきょうだいを対象に，親から受ける養育態度を子どもがどう認知しているかによって，親への対人的信頼感が異なるかどうかについて検討を行った。その結果，親からの養育をより温かいものと認知している子どもの方が，そうでない子どもよりも親への対人的信頼感が高いことが示された。一卵性双生児は同一の遺伝子を有している。そして同じ家庭で養育が行われている。それにもかかわらず，親からの養育態度の認知が対人的信頼感の違いに影響を与えているという結果が示された点において，この研究はとても有益であろう。この研究では，親から受ける養育態度に対する子どもの認知を尺度として研究が行われている。そしてその結果，養育態度に対する認知の違いによって対人的信頼感にも違いが出るということが明らかになった。このことは，実際の養育態度ではなく，その養育態度に対する「子どもの認知」が，親との愛着関係に影響を与えているということを表していると考えられる。

問題と仮説

親の養育態度が子どもに与える影響はさまざまである。従来の研究でも，親の養育態度と学習意欲との関連を示した研究は数多くある。しかし，養育態度の「子ども側の認知」に注目し学習意欲との関連を研究したものは十分にあるとは言えず，さらに「養育態度の認知」と「学習意欲」との直接的な関連を示した研究は少ない。

したがって本研究では，子どもに大きな影響を与えると考えられる親の養育態度に着目し，「親の養育態度に対する認知」と「子どもの学習意欲」との直接的な関連を検討することを目的とする。仮説として，①子どもは親から統制の強い養育を受けた場合，意欲的な学習が行われなくなる，②親からの情緒的支持がある場合，学習意欲は向上する，という2点を立てて検討していく。

従来の養育態度に関する研究は，愛着関係との関連が見られることも多いため，学童期を対象としたものが比較的多くなっている。そこで今回の研究では，従来の研究に多くは見られない青年期を対象として研究を行う。特に高校生は文系・理系の選択や進学・就職の選択など将来の進路を決定する時期であり，学習意欲の低下はそれらの重要な決定に影響を及ぼす可能性がある。したがって本研究では高校生を対象に，養育態度の認知が学習意欲に及ぼす影響について検討していく。

方法

調査対象者

埼玉県公立高等学校に在学する高校3年生189名であった。有効回答数は184名であり，その内，男性67名，女性117名であった。

手続き

2015年7月，学級活動時間中に質問紙を配布し調査を行った。

質問項目

フェイスシートにおいて，性別，年齢，学年，同居している家族，主要5科目(国語・数学・英語・理科・社会)の得意不得意および好悪，部活動への所属，自身の教育に最も関わりが深いと思う人物について尋ねた後，以下の80項目に回答を求めた。

親の養育態度に対する認知　辻岡・山本(1976)の作成した，親子関係診断尺度(EICA)(40項目，5件法)を用いた。EICAは「情緒的支持(Emotional Support)」,「同一化(Identification)」,「統制(Control)」,「自律性(Autonomy)」という4つの因子で構成されており，「私の言うことにいつも耳を傾けてくれる」,「心配事をじっくり聞いてくれるので私の気持ちが楽になる」等の質問項目が含まれていた。なお，それぞれの因子についてCronbachの信頼性係数を算出したところ，情緒的支持はα

=.94，同一化はα=.92，統制はα=.90，自律性はα=.89であった。そのため，先行研究どおり4因子と判断し，それぞれの因子を構成する項目の平均値を算出し，それを下位尺度得点とした。

学習意欲　自身の学習意欲について測定するため，下山他(1983)の作成したGAMI(Gakugeidai Academic Motivation lnventory；学芸大式学習意欲検査)(40項目，5件法)を使用した[4]。GAMIは「自主的学習態度」,「達成志向」,「責任感」,「従順性」,「自己評価」,「失敗回避傾向」,「反持続性」,「反学習価値観」という8つの側面を測定するものであり，質問項目には,「自分で目標や計画を立てて勉強をしている」,「勉強が嫌でも，すぐにやり始める」等の項目が含まれていた。なお，下山他(1983)はこれらの下位尺度について,「自主的学習態度」,「達成志向」,「責任感」,「従順性」,「自己評価」を合わせて「学習促進傾向」となり,「失敗回避傾向」,「反持続性」,「反学習価値観」を合わせて「学習抑制傾向」となるとした。そこで，Cronbachの信頼性係数を算出したところ，学習促進傾向はα=.74であり，おおむね信頼性が認められた。学習抑制傾向はα=.61であり，満足できる信頼性ではなかったが，その点に留意して扱うこととした。

結　果

養育態度認知と学習意欲の相関

性別と自身の教育に関わりが深いと思う人物のクロス集計表をTable 1に示した。父親が最も自分の教育に関わりが深いと回答した人は男性12名，女性15名であり，母親が最も自分の教育に関わりが深いと回答した人は男性52名，女性99名であった。その他の人物が最も自分の教育に関わりが深いと回答した人は男女ともに3名であった。一般に子育ての中心は母親であり，先行研究でも養育態度について研究したものは母親を対象としているものが多くあったが，今回の調査対象者においても同様に母親が養育の中心である傾向が見られた。なお，今回の研究では親の養育態度の認知に焦点を当てるため，その他の人物を回答したデータはこの後の分析から除外してある。

次に，調査対象者の養育態度認知の下位尺度と学習促進傾向，学習抑制傾向との相関係数を，教育に関わりが深い人物ごとに求めた(Table 2)。父親が最も自分の教育に関わりが深いと答えた人は27名，母親が最も自分の教育に関わりが深いと答えた人は151名であった。

Table 2より，教育に関わりが深い人物が父親である群では，同一化と学習促進傾向に比較的強い正の相関が示され(r=.52，p<.01)，自律性と統

Table 1　性別と自身の教育に関わりが深い人物のクロス集計表

	父	母	その他	合計
男性	12	52	3	67
女性	15	99	3	117
合計	27	151	6	184

Table 2　養育態度認知と学習意欲の相関係数

	情緒的支持	同一化	統制	自律性	学習促進傾向	学習抑制傾向
情緒的支持	−	.40**	-.35**	.32**	.39**	-.18*
同一化	.30	−	.19*	.20*	.15	.15
統制	-.35	.35	−	-.28**	-.17*	.30**
自律性	.28	.16	-.49**	−	.15	.09
学習促進傾向	.29	.52**	.24	.00	−	-.34**
学習抑制傾向	-.28	.06	.16	.28	-.46*	−

*p＜.05,　**p＜.01
左下＝父親(N=27), 右上＝母親(N=151)

制に比較的強い負の相関が示された(r=-.49, p<.01)。また，学習促進傾向と学習抑制傾向との間にも比較的強い負の相関が示された(r=.46, p<.05)。さらに，教育に関わりが深い人物が母親である群では，情緒的支持は同一化と比較的強い正の相関を示し(r=.40，p<.01)，統制とはやや強い負の相関を示した(r=-.35，p<.01)。情緒的支持は学習促進傾向とも比較的強い正の相関を示したが(r=.39，p<.01)，学習抑制傾向とは弱い負の相関を示した(r=-.18，p<.05)。また，統制と学習抑制傾向との間にはやや強い正の相関が示され(r=.30，p<.01)，学習促進傾向と学習抑制傾向との間にはやや強い負の相関が示された(r=-.34, p<.01)。

養育態度認知と学習意欲の重回帰分析

次に，養育態度の認知が学習促進傾向・学習抑制傾向に及ぼす影響を検討するため，重回帰分析を行った。その結果をTable 3に示した。重回帰分析の結果，学習促進傾向の重回帰決定係数は.12であり，0.1%水準で有意であった。情緒的支持から学習促進傾向への標準偏回帰係数は.34であり，0.1%水準で有意であった。また，学習抑制傾向について，重回帰決定係数は.15であり，0.1%水準で有意であった。学習抑制傾向への標準偏回帰係数は，情緒的支持が-.24，統制が.26，自律性が.25であり，いずれも1%水準で有意であった。

続いて，教育に関わりが深い人物ごとに群分けをして重回帰分析を行った。その結果をTable 4およびTable 5に示した。Table 4に示されるように，教育に関わりが深い人物が父親である群(27名)の学習促進傾向の重回帰決定係数は.19であり，10%水準の有意傾向が見られた。また，学習抑制傾向の重回帰決定係数は.16であり，10%水準の有意傾向が見られた。自律性から学習抑制傾向への標準偏回帰係数は.54であり，5%水準で有意であった。さらに，Table 5に示されるように，教育に関わりが深い人物が母親である群(151名)の学習促進傾向の重回帰決定係数は.13であり，0.1%水準で有意であった。情緒的支持から学習促進傾向への標準偏回帰係数は.37であり，0.1%水準で有意であった。また，学習抑制傾向の重回帰決定係数は.13であり，0.1%水準で有意であった。学習抑制傾向への標準偏回帰係数は，情緒的支持が-.22，自律性が.20であり，いずれも5%水準で有意であった。また，統制から学習抑制傾向への標準偏回帰係数は.25であり，1%水準で有意であった。

Table 3　重回帰分析結果(全体N=178)

	β	
	学習促進傾向	学習抑制傾向
情緒的支持	.34***	-.24**
同一化	.07	.12
統制	.02	.26**
自律性	-.01	.25**
R^2	.12***	.15***

**p<.01, ***p<.001

Table 4　重回帰分析結果(父親N=27)

	β	
	学習促進傾向	学習抑制傾向
情緒的支持	.24	-.30
同一化	.40	-.06
統制	.16	.35
自律性	-.06	.54*
R^2	.19†	.16†

*p<.05, † <.10

Table 5　重回帰分析結果(母親N=151)

	β	
	学習促進傾向	学習抑制傾向
情緒的支持	.37***	-.22*
同一化	.00	.15
統制	-.04	.25**
自律性	.02	.20*
R^2	.13***	.13***

*p<.05, **p<.01, ***p<.001

考　察

今回の研究では，親の養育態度に対する認知と子どもの学習意欲との関連を検討することを目的とした。仮説として，①子どもは親から統制の強い養育を受けた場合，意欲的な学習が行われなくなる，②親からの情緒的支持がある場合，学習意欲は向上する，という2つの仮説を立て，研究を行った。

仮説①に関する考察

親の養育態度に対する認知(情緒的支持・同一化・統制・自律性)が学習抑制傾向に及ぼす影響を調べるために，重回帰分析を行った。その結果，情緒的支持から学習抑制傾向への負の標準偏回帰係数が有意であり，統制から学習抑制傾向への正の標準偏回帰係数が有意であった。この結果から，親からの養育を自分の気持ちに寄り添ってくれるものであると感じず，統制的なものであると認知しているほど学習意欲は低下することが明らかとなった。

さらに，重回帰分析の結果，自律性から学習抑制傾向への正の標準偏回帰係数も有意であった。これは，親からの養育を自分の自主性を重視し，自分の好きなようにさせてくれると認知しているほど，学習意欲が低下することを示している。つまり，親からの養育に対して統制力が強いと感じていても学習意欲は抑制されるが，反対に自由度が高いと感じていても学習意欲は抑制されるということである。統制と自律性という反対の養育態度が，どちらも学習意欲の抑制に影響を与えるという結果となった。山下他(2010)は，親の養育態度は子どもの自尊感情に影響を与えるため，愛情や共感だけの過保護な養育態度ではなく自律を促進する養育態度で接し，子どもの自尊感情を高めることが大切であるとした。清水・橘川(2009)の研究結果は，自尊感情の高まりは学習意欲に影響を及ぼすということを示した。これらのことから，子どもに対して過保護ではなく自律を促す親の養育態度は，学習意欲の向上につながっていくと考えられた。しかし今回の研究結果は，そのような考えを支持するものではなかった。

このように，自律性を促す養育態度が学習意欲の抑制に影響を与えた要因として，自律性，つまり親から自由にさせられるということが，子どもにとって一種の親からの無関心の表れに感じたということが考えられる。思春期の子どもたちにとって，親からの支配的態度は煩わしく感じ反抗心を感じさせるものであろう。それゆえ，親からの勉強への期待に反発する形で，学習意欲が抑制されると考えられる。反対に，親からの統制がない，自分の好きなようにさせてくれる場合，自分の自由さに対して反抗することはほとんどないだろう。しかし，自分の自由にさせてくれるということは，言い換えれば自分に対する干渉がないということでもある。そこで，子どもは自分に対する関わりの少なさ，つまり親からの愛情を感じることが少ないのではないだろうか。その結果，親との愛着関係がきちんと形成されず，今林(1992)の研究に示されたように，愛情という社会的欲求が満たされないことでより高次の欲求である学習に対する意欲も形成されないと考えられる。

ただし，教育に関わりが深い人物ごとの結果を見ると，母親の結果は全体の結果と同じ傾向が見られるが，父親の結果は自律性から学習抑制傾向への正の標準偏回帰係数のみ有意であった。また，重回帰決定係数においても，父親の結果は学習促進傾向・学習抑制傾向ともに10%水準の有意傾向が見られただけであった。このように母親と父親で養育態度の影響に違いが見られた理由として，サンプル数に大きな差があったということが挙げられる。厚生労働省(2011)によると，配偶者が出産した男性労働者に占める育児休業取得者の割合は，2004年度では0.56%であったのに対して2009年度では1.72%となっており，以前よりも父親の養育への関わりは増加傾向にあるといえる。しかしながら，現代家庭において養育の主体となる人物は母親であることが多いだろう。そのため，今回の調査でも教育に関わりが深い人物として母親を挙げる割合が高く，父親群のサンプル

数が十分に得られず，信頼性のある結果が得られなかったことが推測される。

また，統制的な態度や自律性を高める態度の認知が学習意欲抑制に影響を及ぼすことは示されたが，今回の結果において重回帰決定係数は全体として.15前後に留まっており，親の養育態度に対する認知から学習意欲へ及ぼす直接的な影響はさほど大きくないと言える。このような結果となった理由として，今回の研究では養育態度に対する認知から学習意欲へ及ぼす直接的な影響を検討していたが，親の養育態度が子どもの学習意欲に影響するのではなく，むしろ子どもの学習態度が親の養育態度に影響していたという可能性が考えられる。例えば子どもの勉強に対する意欲が感じられないため，子どもに対して口を出したり勉強を強制させたりするということもあるだろう。また，毛利他(2001)の研究にもあったように，統制的な態度がストレスとなり，そのストレスが媒介して学習意欲が阻害されていたということも考えられる。したがって，一概には親の統制的な態度の認知がそのまま学習意欲抑制につながるとは言えないため，仮説①が十分に支持されたとは言えないだろう。

仮説②に関する考察

親の養育態度に対する認知(情緒的支持・同一化・統制・自律性)が学習促進傾向に及ぼす影響を調べるために，重回帰分析を行った。その結果，情緒的支持から学習促進傾向に対する正の標準偏回帰係数が有意であった。この結果から，親からの養育を自分に共感的であると認知しているほど学習意欲は向上することが明らかとなった。

このことから，親からの情緒的支持は，子どもの学習意欲に影響を与えることが示された。子どもは親からの共感，安心感，気持ちのつながりを得ることができればできるほど，より自主的な学習につながってゆく。しかし反対に親からの共感的態度がなければ，学習意欲は削がれてしまう。子どもの学習を促すために，子どもの心を思いやる愛情を持った働きかけは大切なものだと言えるであろう。

しかし，教育に関わりが深い人物ごとの結果を見ると，母親は全体の結果と同じく情緒的支持から学習促進傾向への正の標準偏回帰係数が有意であったが，父親には有意な標準偏回帰係数が見られなかった。このような結果となった理由として，1つには仮説①の考察で述べたようにサンプル数の差があるということも挙げられるが，子どもにとって父親と接する時間が少ないということも考えられるのではないだろうか。労働政策研究・研修機構(2012)による調査によると，ふたり親世帯に比べて，ひとり親世帯，とくに父子世帯の保護者は子どもと一緒に過ごす時間が短くなっており，ふたり親世帯でも，父親に限ってみれば子どもと一緒に過ごす時間が短くなっているという。父親と一緒に過ごす時間が短いということは，父親からの影響を受ける機会も少ないということにつながるのではないだろうか。あるいは，一緒に過ごす短い時間の中で，子どもの学習場面へ関わる時間までは取れていないという可能性も考えられる。これらのことから，父親の養育態度が子どもの学習意欲の促進に与える影響が見られなかったのではないだろうか。

また，仮説①の考察でも述べたが，今回の結果において重回帰決定係数は全体として.12であり，親の養育態度に対する認知から学習意欲へ及ぼす直接的な影響はさほど大きくないため，仮説は十分に支持されなかったと言える。親からの情緒的支持は学習意欲促進に影響を与えるが，それ以外の要因が大きく影響していると考えられる。例えば，情緒的な関わりがあることで，親への愛情が生まれ，喜んでもらうために勉強をするということも考えられる。あるいは，情緒的な関わりの中で，もっと自分に対して注目してほめてもらいたいという思いが生じることもあるだろう。そのような，情緒的支持の認知がどのような媒介変数を介して学習意欲に影響を与えているかということについても，今後さらなる検討が必要だろう。

総合考察

今回の研究の結果，学習意欲促進には情緒的な関わりが，学習意欲抑制には統制的な関わりが影響を及ぼしていることが示された。さらに，親からの養育を自分の自律性を促し自主性を重視してくれると認知していると，学習意欲の抑制に影響するという結果も示唆された。

これらのことから，親は支配的な態度だけではなく，子どもに好き勝手にさせるような態度にも注意を向けるべきであるということが示唆された。子どもに何かを強要しないように干渉するのをやめるということでは，子どもは親からの関わりを希薄に感じてしまうだろう。自律性の尊重は，情緒的支持の欠如と表裏一体の関係であるとも言える。そこで，やはり大事になるのは親からの情緒的支持，すなわち共感的態度や愛情であると考えられる。親が自分のことを理解してくれていると感じることで愛着が形成される。乳幼児の愛着理論と同様に，子どもは親との愛着が形成されることでそれを安全基地とし，学習を含めたあらゆることへの積極的態度へとつながってゆくのではないだろうか。

しかし，本研究では高校生を対象に親の養育態度の認知と学習意欲の関連について調査を行ったが，親の養育態度の認知は学習意欲に大きく影響を与えているとは言えず，親からの養育を統制的だと認知していると子どもの学習意欲は低下するという仮説，親からの養育を情緒的支持があると認知していると子どもの学習意欲は向上するという仮説のどちらも十分に支持されなかった。学童期を対象とした先行研究とは異なる結果となった理由として，高校生の家庭で過ごす時間が学童期よりも少なくなったことが挙げられるだろう。中学校や高校の多くでは放課後に部活動があり，部活動に所属する生徒は朝から夕方遅くまで学校で過ごすことも少なくないのではないだろうか。家庭で過ごす時間が少なくなったことで，学校などその他のコミュニティで受ける影響が増加し，親の養育態度から受ける影響の減少につながったのではないかと考えられる。高校生には親の養育態度の認知よりも学習意欲の促進・抑制に影響を与える要因がその他にもあると推測され，今後更なる調査が必要となるだろう。

研究の課題

今回の研究では，調査対象者が高校3年生のみであり，また，調査対象者の男女比が等しくなかった。これらのことから，今回の研究のサンプルには大きな偏りがあったと言わざるを得ない。したがって，今後の研究では男女の人数バランスを考慮しながら，高校1年生から3年生まで対象の範囲を広げてサンプリングすることが重要になるだろう。

また，学習意欲を測定する尺度として使用した下山他(1983)のGAMIは，小学3年生から高校3年生までを対象としたものであったため，高校生の学習意欲だけを測定するものとして，文面や内容の面にやや不十分なところがあった可能性がある。したがって，今後の研究では，高校生用の学習意欲尺度を作成し，それを用いて改めて親の養育態度に対する認知と高校生の学習意欲との関連を研究することが必要であると考えられる。

脚　注

1. 本研究は，著者が平成27年度に立教大学現代心理学部心理学科に提出した卒業論文の一部を加筆・修正したものである。
2. 本研究の結果の一部は，日本コミュニティ心理学会第19回大会(2016)で発表された。
3. 謝辞
本研究に際して，貴重な時間を割いて質問紙調査にご協力下さいました埼玉県A高等学校の先生方，生徒の皆様へ心より感謝申し上げます。また，執筆に際し様々なご指導を頂きました箕口雅博教授，多くのご指摘を下さいました箕口雅博研究室の皆様に深謝致します。
4. ただし，この尺度は小学生からの使用が想定されているため，そのまま高校生を対象に使

用することは適切ではないと考え，項目内容の用語や漢字を一部変更して使用した。

引用文献

ベネッセ教育総合研究所(2015). 第5回学習基本調査報告書 ベネッセ教育総合研究所 Retrieved from http://berd.benesse.jp/shotouchutou/research/detail1.php?id=4862 (2017年8月1日)

肥後橋 敬子(2005). 母親の養育態度が子供の社会的スキルに及ぼす影響 和歌山大学教育学部教育実践総合センター紀要，*15*，197-206.

角谷 英則(2008). 教養教育の再構築：「学習意欲」と「動機づけ」の視点からかんがえる 高等専門学校の教育と研究 日本高専学会誌，*13*(2)，97-102.

国立教育政策研究所(編)(2013). OECD生徒の学習到達度調査～2012年調査国際結果の要約～ 文部科学省.

厚生労働省(編)(2011). 平成23年度版厚生労働白書 日経印刷

宮田 正和(2013). 教育現場におけるメンタルヘルス 心身医学，*53*(10)，905-911.

毛利 友美・伊達 美和・廣畑 雄・武内 清輝・中井 朋昭・庄田 明子…塩見 邦雄(2001). 青年期における学校ストレス反応と親の養育態度の関係について(II) 日本教育心理学会総会発表論文集，(43)，323.

内閣府(2012). 子ども・子育て支援法(平成24年法律第65号) 内閣府 http://www8.cao.go.jp/shoushi/shinseido/law/# kanren3pou (2017年8月1日)

Rosenberg,Morris(1979). *Conceiving the self*. New York, Basic Books.

労働政策研究・研修機構(2012). 子どものいる世帯の生活状況および保護者の就業に関する調査 労働政策研究・研修機構

酒井 厚・菅原 ますみ・菅原 健介・木島 伸彦・眞榮城 和美・詫摩 武俊・天羽 幸子(2003). 子どもによる親への対人的信頼感：児童・思春期の双生児を対象とした人間行動遺伝学的検討 発達心理学研究，*14*(2)，191-200.

桜井 茂男・桜井 登世子(1991). 児童用領域別効力感尺度作成の試み 奈良教育大学教育研究所紀要，*27*，131-138.

柴山 直・小嶋 妙子(2006). 児童の学習意欲に関する研究：自己効力感との関連について 新潟大学教育人間科学部紀要，*9*(1)，37-52.

嶋野 恵美子・菅原 正和・嶋野 重行(2008). 児童の学習意欲と教師の指導態度及び親との愛着関係に関する研究 日本教育心理学会総会発表論文集，(50)，479.

清水 美緒・橘川 真彦(2009). 小学校高学年における学習意欲に影響を及ぼす要因 宇都宮大学教育学部教育実践総合センター紀要，*32*，117-124.

下山 剛・林 幸範・今林 俊一・黒木 眞由子・塚田 洋二・宮本 光博…前原 辰信(1983). 学習意欲の構造に関する研究(2)：学習意欲の類型化の検討 東京学芸大学紀要 第1部門 教育科学，*34*，139-152.

辻岡 美延・山本 吉広(1976). 親子関係診断尺度EICAの作成 - 因子的真実性の原理による項目分析 関西大学社会学部紀要，*7*(2)，1-14.

上田 吉一(1974). 学習意欲の発達心理 児童心理，*28*(11)，36-43.

山下 芙実子・石 玲・桂田 恵美子(2010). 大学生の親子関係・自尊感情・生き方志向と子ども時代の両親の養育態度との関連：過保護という養育態度の検討 臨床心理学研究，*36*，21-26.

2017.5.9 受稿，2017.6.9 受理